

留学の意義と外国語教員による支援

草 本 晶

1 問題提起

留学へ行った日本人学生は、留学前と比較して格段にオープンに、積極的にになり、自信をつけて帰国する。これは経験上よく知られていることであり、指摘するまでもない。彼らが提出する留学アンケートや報告書からは、語学力が向上したことだけでなく、さまざまな経験を通して視野が広がり、人間的に成長したことが読み取れる。これらの喜ばしい成果は、外国語学習における留学の意義を裏付け、さまざまなプログラムを促進させる重要な論拠となる。

しかし、留学した学生が一人残らず成功体験をしているかといえば、必ずしもそうではない。海外において学生が必然的に経験する異文化との接触は、ストレスとなってひきこもりや無意識のうちに外界を遮断する方向へと向かう可能性もある。たとえば、語学力の不足から生じる誤解やクラスメイトとなじめないことなどを契機に自信を失って部屋に閉じこもり、何の見識も得ないまま帰国するケースや、逆に旅行三昧でどれだけ多くの町を訪れたか自慢するけれども、現地の人とは挨拶程度しか言葉を交わさなかったというケースもこれまでにあった。

外国語教員は、見違えるほど成長した多くの学生たちを見てきた経験から、留学を良いものとして、まだ行っていない学生にさまざまなプログラムを勧

める。しかし、いったん送り出してしまうと、学生たちが現地でどのように何を学んでいるのかについては、ほとんど何も知らない。留学にそれほど大きな効果を期待するのであれば、より多くの学生がより大きな成果をあげられるように、教員側も積極的に支援するべきであろう。

本稿では、「留学の効果」とは何かをいま一度明らかにすることを通して、教員によるサポートの可能性を論じ、併せて外国語学習における目標設定と、そこから導きだされる授業のあり方についても言及する。

2 「留学の効果」とは

前節でも述べたように、留学した学生の多くは「成長し、大人になって」帰国する。しかし、これは具体的に何を意味しているのだろうか。

1つには、異文化適応を通してさまざまな態度や姿勢が向上することが挙げられる。たとえば、コミュニケーションの相手に対する公平な姿勢や、日常生活における積極性／自発的行動、自信などである。人は困難に直面し、それを乗り越えることで学び成長するものだが、留学中、異文化の環境（すなわち言葉が思うように通じないこと、家族や友人から離れた生活、慣れない気候や習慣）でさまざまな「困難」が待ち受けていることを考えると、留学を通して成長することは、ある意味必然である。

もう1つの側面は、異文化理解である。学生たちは、外国でマイノリティであることを経験し、歴史的背景や価値観が異なる人間と交流する。新しいことを発見する一方で、日本人としてのアイデンティティを意識し、自分の価値観が唯一のものでないことに気づく。欧米での状況と比較すると、日本では文化的背景がまったく異なる人に出会うことや、そのような人とじっくり話をする機会は、多いとは言えない。そういう意味で、留学は異文化理解を通して自分自身を相対化する能力を身につける良いチャンスと言える。¹

¹ Byram/Gribkova/Starkey (2002)は、異文化コミュニケーション能力を構成する、態度、知識、スキルと価値観の4つの要因について、授業では知識とスキルは扱われ

では、異文化適応能力と異文化理解能力は、具体的にどのような過程を経て、身に付くものだろうか。感覚の鋭い学生は、異文化の環境において自発的、直感的に何が重要なのかを理解し、自分なりに努力をすることで「いつのまにか」これらの能力を身につけるようだ。一方で、前述したように異文化適応できずに閉じこもり、異文化理解のチャンスがあることを知らないまま帰国する学生もいる。外国語教員として、このような学生をどのように支援できるだろうか。

サポートの方法はさまざまあるだろうが、本稿ではとくに2つの観点から論じたい。1つめは、異文化適応において、学生の留学ストレス²を和らげることで、もう1つは、学生に異文化理解の重要性を認識させることである。

3 留学ストレスと異文化適応

この節では、現地で学生が直面する問題を確認し、彼らがその問題を克服するために教員ができる支援について考察する。その際、先行研究を省みるだけでなく、2009年のドイツ春期語学研修に参加した学生について得られた所見についても述べる。

3.1 先行研究

日本人の異文化適応に関する研究は多い。高校生・大学生の留学時の異文化適応に関しては、留学中のストレス要因や適応過程の分析のみならず、近年では、現地でのコミュニケーション・ルールに注目した「対人関係スキル」

るものの、態度や価値観については教授法が確立していないため取り上げられることが少ないこと、しかし、留学の際には、まさにこの態度の変化や価値観の見直しといった情動面での成長が最も重要になると述べている。(p.19)

² 一般には「カルチャーショック」と呼ばれている現象について、ここでは「留学ストレス」という用語を用いることにする。それは「カルチャーショック」が文化摩擦による体調不良のような強いストレスを想起させるのに対し、ここでは学生が直面するつまづきや戸惑いなど、軽度のストレスを中心に論じるためである。カルチャーショックの概要については、八代ほか(2009) p.261ff. を参照。

や「ソーシャル・スキル」の獲得について議論されるようになってきている。

たとえば植松（2004）は、「滞在国の対人スキル」、「民族意識」、「セルフコントロール」をキーワードに日本人留学生の異文化適応の関連要因について調査している。日本人留学生にとって、現地の人とどのように接するべきかという対人スキルを獲得することが適応過程で何よりも重要とした上で、自民族と他民族のどちらを志向するかによって適応タイプが異なること、また、現地での学業への適応においては「なんとかなるさ」と気をそらすセルフコントロールができることが、効果的であるという結論を提示した。

また、八島（2004）は、アメリカに1年程度留学する高校生を対象に、量的質的ともに詳細な分析を行っている。ここではとくに「ソーシャル・スキル」の重要性を明らかにするとともに、このスキルの学び方について具体的に提案をしている。さらに、現地で留学生を支えるホストファミリーや友人といった「ソーシャル・サポート・ネットワーク」や、留学生本人の言語運用能力や外向性についても綿密な調査を重ねている。とくに、留学生に「ソーシャル・スキル」がある程度身に付いていても、不安を抱えた状態では力を十分に発揮し得ないとし、自分の能力を肯定的に認識することで自信を持つことが重要であるという説は、示唆に富んでいる。

さらに、高濱・田中（2010）は「ソーシャル・スキル学習」としてロールプレイを用いた実践トレーニングの例を紹介している。学習者は「友人を作る」、「先生に質問する」などのスキルを学習し、それを演技した様子をビデオに数回記録して、自分でフィードバックするという形式を取っている。留学前教育の1例として参考にできるだろう。

3.2 ドイツ春期語学研修参加者のサポート

筆者も、Byram/Gribkova/Starkey(2002)³を参考に、ドイツ春期語学研修⁴

³ Byram/Gribkova/Starkey (2002) “Developing the Intercultural Dimension in Language Teaching - A Practical Introduction for Teachers”. この小冊子は、欧州評議会によってまとめられ、異文化コミュニケーション能力を外国語授業においてどう身につけさ

の参加者を対象として、異文化適応のサポートを試みた。ここでは、ソーシャル・スキルをトレーニングするというより、異文化接触時の自分の反応や感情を認知することで、不安要素となるストレスを軽減することと、自分の成功体験を省みることによって自信を獲得することを目的とした。Byram 他は、学習者が留学へ行く際の教員のサポートについて、次のように述べている。

The teacher's role is to structure the learning experience, to ensure that the 'culture shock' is productive and positive, and not overwhelming and negative, and to help learners to analyse and learn from their responses to a new environment.⁵

そこで、学生たちが自分で状況を把握し、自己分析し、方略を立て、それを実践して、自分でフィードバックする、という学習の段階を踏めるよう、次の手順をなぞることに留意した：1) ドイツでは日本と違うことがあるということに気づく、2) 何が違うのか自分で認識する、3) 慣れない状況に直面したときどのような気持ちになったか、その場ではどのような反応したのかを省みる、4) 再び同じような状況に直面したとき、どうしたいか考える、5) あらかじめ用意しておいた対処法を実践してみて、その結果を記録する、

せるのか、という問いに対する実践ガイドの形式を取っている。特に p. 19ff. では、留学における異文化との接触をどのように受け入れ、そこから何をどのように学ぶのか、具体的に準備や評価の方法を提案している。

⁴ ドイツ春期語学研修は、毎年2月中旬から3月中旬までの4週間、ドイツのイェーナ大学で開催されている。今回調査対象とした2009年2月の研修には、ドイツ語専攻の学生（1～2年生；週に6単位のドイツ語授業）と第二外国語のドイツ語履修者（1～3年生；週に2単位のドイツ語授業）が参加した。12名の参加者は、学科／専攻や学年がまちまちで、多数派とよべる集団が存在しない状態であった。学科／専攻や学年および男女の正確な内訳は次のとおり；ドイツ語・ドイツ文化専攻1年生：男2、女1、ドイツ語学科2年生：男2、女1、英語コミュニケーション専攻1年生：女2、英語学科2年生：女1、英語学科3年生：女1、国際交流・国際協力専攻1年生：女1、日本語学科3年生：女1。

⁵ Byram/Gribkova/Starkey (2002), p.19

6) 自分で問題が解決できることを認識する。このようなコンセプトの下、学生には研修前、現地到着後、帰国後に3回グループ討論をしてもらい、さらに帰国後「異文化体験の記録と自己評価」を記入してもらうことにした。

3.2.1 グループ討論

研修に出発する前の討論では、参加者の学生に、研修への期待および不安について話し合ってもらった。現地で直面するであろうストレスをあらかじめ予測し、気持ちの準備をしておくことで、これを軽減することが狙いである。また、期待を列挙することで研修に対するポジティブなイメージを強める目的もあった。このとき挙げた項目（資料1）を見ると、学生たちは特にヨーロッパの文化に触れること、ドイツ語で会話すること、ドイツの食事および新しい友人を作ることに對して期待を抱いていることがわかる。逆に不安項目を見ると、語学力の未熟さ、寒くて乾燥した気候、慣れない食事、困ったときの対処やアジア人に対する偏見や嫌悪が挙げた。

この討論を通して、上記の学習段階で言えば1)～4)をシミュレーションをしたことになる。この段階では、参加者が互いに自分の感情を描写し、それぞれが同じような不安を抱えているということを認識することで、ある程度の安心感を得ることができた。

さらに、この学習手順に学生たちがよりなじめるよう、現地でも到着後5日目に、最初の印象と滞在初期の苦勞について話し合った。ここでのポイントは、学生たちに日本との違いを気づかせること、違いを発見することがおもしろいと思わせること、そして到着直後の不安がある程度解消された段階で、その時点までに成し遂げた事柄を成功例として自覚させることであった。すなわち、学習段階では1)～6)の全てを通して見たことになる。

時差ボケや密なスケジュールで疲労感が強かったにも関わらず、学生たちは真摯な態度でこのセッションに臨んでくれた。日本との違いを発見して報告するのはおもしろらしく、さまざまな疑問が報告された（「なぜ街灯がオレンジ色なのか？」=暗くてこわい、「なぜカーテンを開めないのか？」=外を

通る人は家の中をのぞけてしまう)。これらの疑問に対して、同席していたドイツ人教員から直接説明があったことは、ステレオタイプの固定を避ける意味で有意義であった。この場では最初の成功体験も報告され(「ホストファミリーと分かりあえた」、「一人でスーパーで買い物ができる」)、学生たちの自信につながったようであった。(資料1)

さらに帰国後には、報告会と称して振り返りの場を設けた。ここでは、出発前に列挙した期待や不安を再びとりあげ、期待がどのような形で満たされたか、また不安はどこまでの中したか、1つ1つ検証した。学生たちは、ほとんどの不安が杞憂だったのに対して、多くの期待(目標)が満たされたことを確認した。彼らは同時に、研修の前後でどれだけ考え方が変化し、それによって成長したかを自覚することになった。学習段階では6)の部分にあたる。

出発前、研修中、帰国後にグループ討論を3回行ったことで、上記の学習段階をすべて踏むことができた。特に学生たちが自分の抱えているストレスを認識し、客観的に捉えることで感情を整理し、問題を克服した後にこれを成功体験として振り返ることができたことが重要である。

3.2.2 異文化体験の記録と自己評価⁶

研修後、参加者に「異文化体験の記録と自己評価」を書かせたところ、具体的なストレスの場面や、学生たちがどのようなストラテジーを用いて困難な状況に対応したかが明らかになった。(資料2)

⁶ Byram/Gribkova/Starkey (2002), p.30ff. の“A Record of my Intercultural Experience”と“A Self-assessment of my Intercultural Experience”を日本語に訳して用いた。この「記録」と「自己評価」は、異文化コミュニケーション能力を評価するための様々な方法のうちの一つと位置づけられ、とくに欧州評議会が提唱している「言語ポートフォリオ」中の「言語バイオグラフィー」のコンセプトに基づいて質問項目が決められている。「言語バイオグラフィー」は、学習者が自分の能力を記録/評価し、これまでの学習成果を確認する場であると同時に、これからの学習目標や学習計画を立てるための基盤として利用される。

ストレスの場面は、たとえば「部屋に一人でいるとき」、「友人のホームステイ先で会話ができなかったとき」、「周囲がドイツ人ばかりで自分がマイノリティであると自覚したとき」などであった。すなわち、慣れた環境から一人離れているという孤独感、言語運用能力の不足からくる自信の喪失、少数派であることの居心地の悪さであり、留学時には頻繁に直面する問題といえる。その対処法は、たとえば「同じように感じている友人と一緒に食事をする」、「言葉の壁にぶつかった時は、一人になって気持ちを落ち着かせ、同じ間違いをしないように勉強する」、「暗い街灯が嫌だったが、それが普通だと言われてからは慣れた」などであった。すなわち、現地でサポーターとなる友人と楽しい時間を過ごしてストレスを忘れる、自分なりに原因を特定し落ち着ける場所に退避してからもう一度挑戦する、理解できないことに対して説明を受けることで納得するなど、自分たちなりに問題を乗り越えた様子が分かる。それ以外にも「自ら積極的に行動し、口を開くことが重要」、「自分とは違う考え方だと感じたが、そういうものとして受け入れた」、「ドイツに住んでいるトルコ人について興味が湧いた」などの記述から、現地での行動のしかたを自ら学んだことや、異なる考え方を許容すること、少数派への視点など、異文化理解において重要な能力や考え方が培われたことがうかがえる。

3.3 異文化適応の支援

今回行ったような、討論や異文化理解能力の自己評価という方法で、どの程度学生たちをサポートできたのか、明確な答えは出しにくいですが、春期語学研修の全体的な印象から言えば、学生たちは比較的スムーズに現地に適応できたようである。帰国後のドイツやドイツ人に対するイメージはポジティブで、大学に戻ってからもっとドイツ語を勉強したい、さらには英語もしっかり勉強したいと、学習意欲の向上も見られた。また、協力してストレスを乗り切ったためか、グループ内での人間関係が良くなり、帰国後もたびたび全員で集まっては食事に出かけたり、「できることならまた同じメンバーでド

イツへ行きたい」という発言も聞かれた。出発前は、専攻／学科も学年も異なるために互いにほとんど言葉を交わさない学生たちに、教員側は「もっと親睦を深めておくべきだった」と反省したが、帰国後の様子から見ればそれは杞憂であった。

一方で、4週間という短い留学期間であっても、学生たちは異文化接触の場面で多少留学ストレスを抱えることが明らかになった。具体的にどのような問題を抱えたかについては、出発前や到着後のグループ討論（資料1）および「異文化体験の記録」（資料2）を通してある程度把握することができる。とはいえ、ストレスの感じ方やその原因となる場面状況は個人個人で異なるものであり、学生を一人一人ケアすることも難しい。しかし、学びのプロセスと方法を学生たちに理解させること、さらにその過程で問題が生じた場合には、教員が文化的背景の説明や軌道修正を手助けすることで、十分な支援ができるのではないだろうか。

4 異文化理解の重要性とその認識

異文化理解のための格好の機会である留学において、その意義を知らないまま、好奇心を見せなかったり、現地の人と交流しようとしめないケースがあるのは、残念なことである。むろん、語学力およびソーシャル・スキルの不足と並んで、適応過程でのストレスをある程度解消できないうちは、なかなか困難な面もあるだろう。しかし、異文化理解能力は、外国人のみならず日本人同士でコミュニケーションをする上でも重要であり、教員は学習者にこのことを認識させる必要がある。

そもそも異文化理解能力とは何か。Byram/Gribkova/Starkey (2002) は、異文化理解能力を有している人について「人間が、何層ものアイデンティティから複雑に成り立っていることを理解し、たった1つのアイデンティティから導きだされるステレオタイプを排除できること。一人一人を、外からイメージされた文化の代表例としてではなく、探求に値する性質を持った一個

人として扱うことができること」⁷と述べている。また、異文化コミュニケーションとは「社会的相互作用が成り立つための民主的基盤として、個人の尊重と人権の平等を前提とするコミュニケーション」⁸であるという。個人の尊重と、人権は誰にでも平等に存在しているという価値観は普遍的であり、異文化理解能力がこの価値観を認め、実現するものであるとするなら、進んでこの能力を養うことには意味がある。

異文化理解能力の基本となるのは、自分の文化とは違う現象や習慣を発見・理解しようとする態度やその能力、さらには、自分の文化や価値観が唯一のものではなく、多くの中の1つであると相対的に捉える能力である。これを身につけるのに、留学はまたとないチャンスとなる。なぜならば、異文化環境では、自分が馴染んでいる環境を離れることで「『変』な事柄に慣れ、慣れてる事柄を愛に思う」⁹のが容易になるし、視点の転換をせまる「気づき」の種も必然的に増えるからである。何よりも現地の人と交流する際、とくに自分の文化について説明せざるを得ないとき、視点が変わる可能性は高まるだろう。しかし、留学する本人がこのことに気づいていなければ、せっかくのチャンスも無駄になる。その重要性をどのように認識させればよいのか。

おそらく、学生たちに、留学によって養われる異文化理解能力の意義をそのままレクチャーしても、ピンと来ないだろう。学生たちが留学に期待することも、教員側の期待と多少ずれている。留学前のグループ討論（資料1）でも見たように、学生たちがまず期待するのは、観光客と同じように外国の文化（特に風景や食事）に触れること、そして多少なりとも目的言語でのコミュニケーション能力を高めることである。現地で友人を作りたいという希望もある一方で、自分の語学力に対する不安も大きく、実際のコミュニケーション場面はストレスとなる可能性も秘めている。（現地の人と直接話をするストレスは避けたいと明言した学生もこれまでにいた。）

⁷ Byram/Gribkova/Starkey (2002), p.9, 筆者訳。

⁸ 同上。

⁹ Byram/Gribkova/Starkey (2002), p.19.

ここで培いたいのは、異文化に対する好奇心であり、なぜ違いが生じるのかを考える姿勢である。このような好奇心があれば、異文化環境において、始めは理解できないようなことでもストレスとしてではなく、「なるほど体験」の前触れとしてポジティブに捉えることができる。このような好奇心や異文化に対する肯定的な姿勢は、「新しい発見はおもしろい」という実感を通して体験的に学習するのがよい。異文化理解のためのゲームや「気づき」のための討論トピックは、すでに多く開発されている。¹⁰ これらは、留学前教育で扱うこともできるが、可能な限り普通の授業に取り入れるのがよいのではないか。それは、留学に出かける直前ではなく、早い段階から異文化理解の態度や考え方を身につけさせるという意味もあるし、そもそも留学に対する興味を喚起するという意味もある。その際「授業」とは外国語のみならず、歴史学や社会学、心理学や地域研究などの科目でも取り入れることができよう。

5 結論

留学が外国語学習者にとって特別なイベントであることは間違いない。言語運用能力の向上だけでなく、異文化の環境に適応する中でさまざまな価値観に出会い、自分の文化を振り返ることは、その人の人生を左右するきっかけにもなりうる。ただ、ストレスがあまりにも強かったり、異文化に対して無理解のままだったりすれば、どれほど言語運用能力に長けていたとしても、留学の効果は小さいであろう。大学に勤める外国語の教員としては、留学の意義や効果をいまいちど確認し、意識的に学生たちにそれを伝え準備させることで支援することができるはずである。まず、異文化適応においては、学生たちが自分でストレスを乗り越えられるよう、異文化環境における学びのプロセス（すなわち「気づき」>「意識化／振り返り」>「ストラテジーの構築／試行」>「ストラテジーの評価」>「成功体験の認識」）を辿れるよう

¹⁰ たとえば、八代・町・小池・吉田（2009）、八代・荒木・樋口・山本・コミサロフ（2001）など。

な仕組みを用意するのがよい。また、個人の尊重と人権の平等という価値観を支える異文化理解能力を身につけるためには、普段から授業などで異文化理解のおもしろさを実感できるようなトレーニングを取り入れるのがよいだろう。

6 展望

グローバル化が進む現代において求められているのは、異文化の人々と対等の立場でコミュニケーションができ、協力して問題解決にあたる、オープン・マインドで自信を持った人材である。また、共同作業をする際には、互いへの信頼関係が不可欠であり、一人一人を尊重し平等に接することができることも重要である。異文化教育を通して、このような人間を育成することができるのであれば、これを留学に限定せず大学教育の中に積極的に取り入れるべきである。本稿では、留学する学生を支援する観点から論じてきたが、在学中留学しない者も多い。

異文化教育は、とくに外国語教育においてその使命を果たすことができるのではないか。なぜなら、外国語の授業では、母語と異なる言語で身の回りの世界を表現しようとするところからすでに異文化接触が始まるのであり、目標言語を学習する際には必然的にその背景にある文化を知る必要があるためである。

外国語の授業では具体的に、目的に照らしてソーシャル・スキル学習を積極的に取り入れることが望ましい。なぜなら、異文化適応においてその過程を最も大きく左右するのは「対人関係構築」の度合いであり、そのための「対人スキル」の有無だからである。ソーシャル・スキルを身につけ、それによって自己効力感を高めることは自信につながり、異文化コミュニケーションを支える重要な要因となる。そう考えると、実際の授業では、多少文法的な正確さを欠いた発話であっても、それがコミュニケーション上大きな支障をきたさなければ、敢えて訂正しないという教員側の姿勢があってもよい。

問題は、教員側の準備がまだ整っていないということだろう。授業は具体

的にどのように進めるのか、教材は何を使用するのか、制約された枠組みの中で何ができるのか、という数々の問いに答えを出すには、それぞれの機関において時間をかけた議論が必要である。そのために、教員のための勉強会やワークショップの場を増やすことが重要である。

7 参考文献

- Byram, M. (1997) Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Clevedon: Multilingual Matters
- Byram, M., Gribkova, B. & Starkey, H. (2002) Developing the intercultural dimension in language teaching. A practical introduction for teachers. [Online: <http://www.lrc.cornell.edu/director/intercultural.pdf> : 6. October 2011]
- Eßer, R. (2006) Die deutschen Lehrer reden weniger und fragen mehr ... Zur Relevanz des Kulturfaktors im DaF-Unterricht. Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht, 11:3, 18 pp. [Online: <http://zif.spz.tu-darmstadt.de/jg-11-3/beitrag/Esser1.htm> : 6. October 2011]
- Sercu, L. (2002) Autonomes Lernen im interkulturellen Fremdsprachenunterricht. Kriterien für die Auswahl von Lerninhalten und Lernaufgaben. Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht, 7 (2), 16 pp. [Online: <http://zif.spz.tu-darmstadt.de/jg-07-2/beitrag/sercu1.htm> : 6. October 2011]
- 植松晃子 (2004) 「日本人留学生の異文化適応の様相：滞在国の対人スキル、民族意識、セルフコントロールに着目して」『発達心理学研究』15/3, 313-323
- 高濱愛・田中共子 (2010) 「米国留学予定の日本人学生を対象としたソーシャルスキル学習」『一橋大学国際教育センター紀要』1, 67-76. [Online:

<http://hdl.handle.net/10086/18795> : 6. October 2011]

八島智子（2004）『第二言語コミュニケーションと異文化適応—国際的対人関係の構築をめざして』多賀出版

八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美（2001）『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田智子（2009）『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』改訂版、三修社

資料1 出発前と研修中の「期待」と「不安」

出発前の「期待」	出発前の「不安」
<ul style="list-style-type: none"> — ドイツにいる友人に会える (x2) — ヨーロッパを(あちこち)旅行できる (x6) — ベルリンの壁/世界遺産/教会を見に行ける (x2) — 初めてのヨーロッパが楽しみ — ドイツの文化を知りたい — ドイツを楽しみたい — 新しいことがたくさんある (x3) — ホテル(フィットネス・ルーム)が楽しみ(x2) — 食事(ビール/ソーセージ/ケーキ/アイスワイン) (x9) — 買い物 (x3) — サッカー — ドイツ人と話したい — 子どもたちとたくさん話したい — ドイツ人/外国人の友達を作りたい (x3) — グループ内で仲良くなりたい — ドイツ語ができるようになりたい (x3) — 日本を紹介したい 	<ul style="list-style-type: none"> — 一人で電車に乗れるかどうか (x2) — スーパーで買い物ができるかどうか — 道に迷ったらどうしよう — 困ったことが起きたらどうしよう — どれくらいのお金を持っていったらいいか/研修中はお金をどう管理すればいいか (x3) — ホテルで料理ができるかどうか — 何か失くしたらどうしよう — 食事があわなかったらどうしよう (x4) — 具合が悪くなったらどうしよう (時差ぼけ) — 薬(睡眠薬など)持っていった方がいいか — 気候/気温/寒さ/乾燥した空気 (x5) — ホストファミリーはやさしいか — 日本人/アジア人に対する偏見 (x3) — カルチャーショック — ホームシック — ストレス — ドイツ人とコミュニケーションがとれるかどうか (x5) — ドイツ語ができない (x5) — ドイツ人と話す機会はたくさんあるか — どうやってドイツ語を勉強すればいいか (x3) — この研修でドイツ語ができるようになるか
研修中の「期待」	研修中の「不安」
<ul style="list-style-type: none"> — ドイツ語ができるようになる — 買い物をする — ヨーロッパを旅行する — サッカーの試合に行く — ドイツの食事 — ドイツ人と友達になる — 初めてのことをいろいろ見つけて、理解する — 大変なことも乗り越えてうまく立ち回れるようになる — 異文化理解能力を高める 	<ul style="list-style-type: none"> — インターネット代や水道代が高い — 洗濯しなければいけない — ドイツ語ができない — することがない/ひとりぼっち — 太るのがこわい — 野菜が少ない — オレンジ色の街灯が暗くてこわい — 青信号が短い — 窓にカーテンがかかっている — 自分たちは不安が多すぎるのでは?

資料2 「異文化体験の記録」と「異文化体験の自己評価」への回答

異文化体験の記録

A. 感情

興味や関心が湧いたきっかけ：

（たとえば日常生活で、特に自分の文化を振り返るきっかけになった出来事など。）

お風呂の時間。（日本＞夜、ドイツ＞朝）／向こうで出来た友達とバーに行って話したり、友達のホームステイ先に行ったとき、日本の宗教や、うた、天皇のことを聞かれたとき。あとは、文化の違いを感じたとき、「日本はこうだな」と思った。／実際にドイツに行って色々見たり聞いたりした時。／町のようす（車、らくがき、人）。／洗たくものを屋根下にほしていること。

居心地の悪さやホームシックを感じたとき：

（何がその気持ちを引き起こしたか、可能であれば具体例をあげる。）

部屋で一人の時。／体調を崩しなかなか治らず過ごしていて、その週の週末、ホテルでゴロゴロしていた時、ふと一人になって、すごくさびしさを強く感じて「今すぐ帰りたい」と思ってしまった。その日はスタムティッシュで他の部屋の人はいなくて、ちょうど同室の子が洗面所に行ったほんの5分程度でいきなりホームシックになりました。／友達のアパートファミリーの家に遊びに行き食事をしていて、ドイツ語がわからなくて会話ができなかったので、少し居心地が悪いなと思いました。／ルームメイトの態度。／一番最初のころに周りがドイツ人だけでマイノリティを感じたとき。／水の使い方＞（例）お風呂にお湯をためられてしまう。トイレの水は残り湯で流すこと。

家にいるような安心感を感じたとき：

（何がその気持ちを引き起こしたか、可能であれば具体例をあげる。）

ホストファミリーとご飯食べた時。／ホテルで友達や先輩とごはんを作ったりゲームをしたとき！ホテル組は毎日のように夜誰かの部屋に集まって遊んでいたの、すっごく仲良くなれました!!／研修メンバーのみんなと遊んだり、ご飯を食べたりしてる時。／先生や町の人達がやさしかったとき。手伝ってくれたり、自分の質問についていねいに答えてくれたとき。／誰もいない時にゆっくりベッドで眠っているとき。

B. 知識

家族との生活／学校での生活で学んだもっとも大切なこと：

積極的に話しかけること。／自分が今どう思っているのかどう感じているのかを言葉で表現しないと伝わらない。／ドイツ語がわからなくても、頑張って理解しようとする、わからなかったらすぐに質問するという。／1人だけでなく、友達みんなと一緒に生活できたこと。／自分から何かをする積極性。／みずから話しかけようとするので、伝えたいことも少しは伝わるし、新しい単語を知れること。

ドイツあるいはイエーナという町について学んだもっとも大切なこと（現在や過去のこと）：

戦争（WW2）の跡が目に見えるように残っている国（町）があるということ。／歴史的建造物がたくさんあった!!／歴史あるもの（建物）を保存し、伝えること。／イエーナには古い建物を大事にしていること。

ドイツ人との会話を通じて学んだドイツの習慣やマナー（興味を持たれるテーマ、避けた方がいいテーマ、挨拶の仕方、別れ方など）：

食事について。野菜が少ない>不健康では（?）／興味：天皇・宗教のこと。避けるべき：ナチスのこと。これは聞いたりしたわけじゃな

いけど、「聞けなかった」（何となく）。挨拶：お店に入る時のハローの重要性（言うとき店員さんの目が優しくなる!!）／お店に入ったときレジに並んだ時は必ずHalloとあいさつをする!!／サッカーや音楽、文化について聞かれた。相手の目を見て挨拶する。／知り合いに会うと気さくに声をかけてくれる。興味を持たれるテーマ：何でドイツ語勉強しているの？好きな音楽。

C. 行動

ドイツ人に、日本文化との違いや、文化によってものの見方に違いがあること、誤解がどうやって生じるのかを説明することで自分で解決した問題や出来事：

お風呂の時間。ドイツ人＞人に会う前（朝）きれいにする。日本人＞夜寝る前にきれいにする。／パールハーバーについてどう思うかきかれ、私がつもっている目線と違う目線を感じた。／水の価値観。水が高いから使いすぎではダメだと言われたが、若い人に聞いたら日本と変わらないと言われたこと。＞あまり解決していない。

ドイツの習慣や考え方を理解するために、質問などをして、自分なりに答えを出さなければならなかった状況：

散歩時間の長さ。日曜日に「散歩」と言われ、山登りをした。／（ほとんどの）ドイツ人がアメリカ人を嫌いだと聞いて、（みんなで）何故と聞いてその答えに、私自身は共感しなかったけどその考えを受け入れた。／最初は部屋にカーテンがついていないことや電気が暗いことが嫌だったが、それが普通だということを知ったら慣れてきた。

異文化体験の自己評価

A. 異文化の人の生活への関心

私は、異文化の人がどのように日常生活を過ごしているか、特に、メディ

アなどで報道されないため、普通他人には知られていないことについて関心がある。

例：

日曜日、子どもとあそぶ（公園などで）のは父親の仕事。／ベルリンに多く居たジプシーの子供達。田舎の駅にいた歯のないおじさん。> 格差社会？

私は、この社会に存在する主たる集団だけでなく、その他のいろいろな社会集団において、人々がどのような日常生活をしているのかについて関心がある。

例：

エスニック社会。ドイツにいる200万人のトルコ人の生活。

B. 視点を変える能力

私は、他の視点から見ることで異文化をよりよく理解することができること、また彼らの視点から自分の文化を見ることで彼らをよりよく理解できることに気づいた。

例：

歴史のことや日本について聞かれたとき。

C. 異文化での生活に対処する能力

私は、異文化で生活するにあたって起こりうるさまざまな反応（高揚感、ホームシック、精神的なストレスなど）に対処することができる。

例：

言葉の壁にぶつかった時は、とりあえず1人になって心を落ち着かせる。そしてしばらくしたらもう絶対同じ失敗はしたくないと思い勉強をする！／同じ状況におちいつている者同士でおいしい物を食べながら楽しく過ごす。

D. 他の国や文化に関する知識

私は、他の国での生活や、その国／町／人について重要なことをいくつか知っている。

例：

シンガポールではポイ捨てをしたら罰金。オーストラリアでは a をアイと発音する。／ネオナチには気をつける。

どうやって異文化の人に話しかけ、会話を持続させることができるか知っている。

例：

自分がどんどん話をふくらませられるような話題。興味、特技とか。／自分のことを少し話してから、相手のこと（国、文化、関心）を聞いたりする。／ただ単に話しかけると、アジア人なので嫌がられることもあったので、地図や答えてもらいたいプリントを見せて話しかける。会話の持続性はわからない。

E. 異文化コミュニケーションに関する知識

私は、他の見方があることを知らないために起こりうる誤解を解く方法を知っている。

例：

（回答なし）

私は、他の文化に関する新しい情報や新しい視点を、自分でどう発見すればいいのか知っている。

例：

自分の経験と相手の経験を聞きあうことで新しい発見がある。